

Let's Know Hiroshima Castle.

しろうや! 広島城



No.35

広島城下近郊の花見名所～東照宮参道・桜の馬場



「広島城下絵屏風」(当館蔵)より東照宮と桜の馬場。
城下の四季を飾るトップに描かれた桜の名所です。

お花見の季節

春の足音が聞こえてきました。3月下旬にもなりますと桜の開花予想も出され、今年のお花見はどこに行こうか、お弁当は何を食べようかとみなさんそわそわしてきます。広島城にも、開花のお問い合わせが多くなってきます。

江戸時代は、花見の楽しみが庶民のものとなった時期であり、娯楽の少なかった当時において、年に一度のイベントとして気合の入れ方も半端ではなかったようです。朝早く起きて豪華な花見弁当を拵え、「花見小袖」とよばれる晴着に身を包み、お化粧や髪結いもここぞ見せどころと張り切りました。「髪を結



『芸州巖島図絵』(当館蔵)より反橋看花の図

巖島神社南側に現在も残る反橋あたりで花見に興じる一行。弁当、酒、たばこ、三味線でにぎやかに楽しんでいきます。近寄る鹿を追い払おうとしているのも宮島らしい光景です。

ふ側で重箱開けて見せ」という川柳からも心はずむ様子がうかがえます。

こちら広島城も広島の花見名所のひとつですが、江戸時代からそうだったわけではありません。現在本丸堀端を彩る桜は昭和30年代以降に植樹されたもので、江戸時代は落葉後に城内を見透かされないよう常緑樹のスギやヒノキが植えられていましたし、そもそも本丸など庶民が気軽に入れる場所でもありませんでした。それでは、城下の人々にとって花見名所はどこだったのでしょうか？

広島城下近郊一の花見名所

広島城下近郊一の花見名所は、城下の北東に



「芸州広島図」(当館蔵)より 猿猴橋の東に続く松原から桜並木が東照宮まで続いている様子がわかります。

位置する東照宮とその参道でした。東照宮は慶安元年(1648)、浅野家2代藩主の光晟が祖父の徳川家康を祀って造営したものです。東照宮から猿猴橋東詰の松原まで続く参道両側には見事な桜並木が形成され、いつしか広島城下近郊で一番の桜の名所となりました。この並木は通称「桜の馬場」と呼ばれ、様々な絵図や記録の中に見ることができます。桜の馬場に続く松原の松は48本あったことから「いろは松」と呼ばれ、のちに「松原町」の地名の由来となりました。

描かれた桜の馬場

前ページ冒頭の絵図は、文化期(1804～18)頃の広島城下を描いた「広島城下絵屏風」に見られる東照宮と桜の馬場です。南東寄りから俯瞰しています。一双の屏風に四季を描くこの屏風の、春の最初の景色として登場します。また、このページの上の図は文政期(1818～1830)頃の城下を描いた「芸州広島図」に見える東照宮と桜の馬場です。続く松原と猿猴橋もよく見えます。なお、手前(西)の京橋川沿いの花は、桜並木ではなく桃林です。浅野家7代藩主重晟が植えさせたもので、対岸の御泉水(縮景園)から臨むことができました。花見頃には武士も庶民も身分の上下を問わず花を楽しんだと言います。同様の情景はやや古い時期に描かれた「広島全景図」にも見られます。

その他、広島藩士岡岷山おかみんざんが描いたとされる「朝陽岡園図」(広島市立中央図書館浅野文庫蔵)には、尾長村にあった浅野家の別荘・東御山屋敷から見下ろした桜の馬場も描かれています。朝陽岡園八勝のひとつとして、「夾阡桜花(=道を挟む桜の花の意味)」の名で描かれ、はるかかなたには宮島の姿も見えます。

記された桜の馬場

文化・文政期に編纂された広島藩領の地誌『芸藩通史』には、桜埒おうらつ(桜の馬場)は花時の素晴らしい眺めは桃林と相並び、城東の一名勝であると記されています。また、文政5年(1822)に編まれた広島城下の地誌『知新集』には、この桜はいつ植えられたかはわからないが、花の時期になると諸人群集し「たぐひなき壯観なり」と記されています。

大正11年(1923)発行の『広島市史』第3巻には、文化11年(1815)、城下の大年寄たちが楊貴妃桜、緋桜、浅黄桜、鬱黄桜など35本を寄附・植樹したという記事が見えます。翌年に東照宮二百年大祭礼を控えていましたので、いろいろな種類の桜で色を添えたというところでしょうか。ちなみに、現在広島城跡に一番多く植えられ、皆さんにもおなじみの「ソメイヨシノ」は、江戸時代末の園芸品種なのでこの時期の広島ではまだ見られません。桜と言えばまず山桜を指しました。また、『広島市史』には、天保4年(1833)にも、己斐村の山

目付市左衛門から藩主^{なりたか}齊肅に献上された桜の苗木を桜の馬場に植えさせたとの記事が見えます。

江戸時代中期の城下のガイドブック『広島独案内』にも東照宮の桜の時期の賑わいが記されています。東照宮の階段左右にははしだれ桜が、参道の桜の馬場には山桜が植えられ、見事な花を見ながら人々は歌を詠み、それを短冊に書いて花々の枝にたくさんつけていたと言います。この情景は現在では見られない風習ですが、古来より花見の席では和歌や漢詩などの文芸の遊びが雅に行われてきました。桜の花と色とりどりの短冊で非常に美しかったことでしょう。そういえば、花札でも桜に「みよしの」の短冊が掲げられていますね。なお、『広島独案内』については、平成23年度広島城の新着資料として収蔵しましたので、いずれご紹介する機会があるかと思えます。ご期待ください。



溪斎英泉「十二月錦絵 十二月の内 三月 花見」
(国立国会図書館デジタル化資料)

「花見小袖」と呼ばれる晴着で着飾った女性が、桜の枝に短冊を結びつけています。桜の馬場でもこのような情景が見られたのでしょうか。

明治時代以降の桜の馬場ですが、『広島市史』第4巻(大正14年・1925)によると、明治23年(1890)に東練兵場の開設に伴い桜並木は廃滅しましたが、おそらく大正時代のあるとき、有志の寄附によりたくさんの桜の木が再植されました。戦前の広島の人々の記憶に残るあてやかな桜並木もしかし、原爆投下により再度姿を消し、東照宮からまっすぐに延びていた道も現在では区画整理などで向きが変わってしまいました。

(前野やよい)



昭和時代(戦前)の桜の馬場

絵葉書「広島尾長山麓東照宮」(個人蔵)

東照宮の近くには、饒津公園がありました。この公園は明治7年(1874)、二葉の里の饒津神社の境内地に、広島市初の公園として開かれ、園内には明星院や鶴羽根神社もあって、桜の時期には隣接する東照宮とともに花見に遊ぶ人々でにぎわいました。

広島城の桜もきれいです。

お花見に来て下さい。





まだまだ歴史の勉強中！



歴史についてとても詳しい

日本刀を鑑賞してみませんか

パート2 刀装具その1



● 日本刀（以下刀）って、たくさんの部品が組み合わさってるんだね。

● うん、刀は刀身だけでは使えないからね。持ち歩いたり、使用しやすくするための部品だよ。刀装具というんだ。それぞれちゃんと役割があってどれも刀にとって必要な部品なんだよ。

● これなあに？

● 刀装具のひとつつば鐺だよ。刀の鐺はもともとつか柄を持つ手を刃から守るための実用品なんだ。

● へえ、ただの飾りじゃないんだ。でもすごくおしゃれな模様がみえるよ。

● これは鉄製の透鐺すかしつばとよばれるものだけど、干支の文字えとが表されているよ。さて問題、どうやって造ったかわかるかい？

● えーと…、溶かした鉄を型に流し込んだ。

● ブブー！

● 感じ悪いな。じゃあ細長い鉄を曲げてつなげた。

● 紙面が少ない。答えを言おう！1枚の鉄の板を糸のこで切りぬいてるんだよ。そして、網目みたいな模様に仕上げるのさ。もちろん機械なんかないから全部手作業さ。職人も注文主のこだわりには負けない目いっぱいめいばいの技で答えたんた。

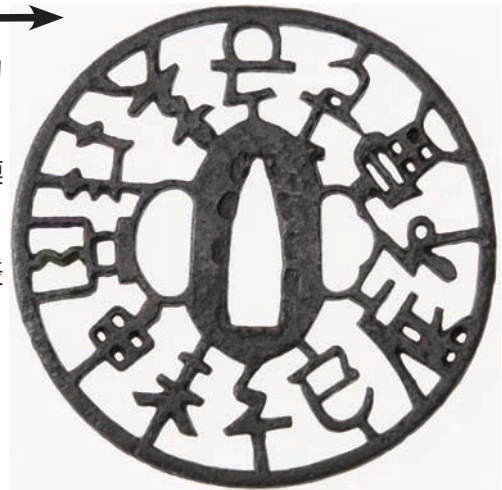
● なぜそこまでこだわったんだろう。

● 刀は武士の魂こゝろっていわれるくらい、武士にとって一番大切な道具だったんだ。そりゃあこだわっちゃうよね。そして、刀装具そのものが優れた美術工芸品としてたくさんの人に愛されているんだよ。

● そういえば、広島城にも鐺がたくさん展示されてるよね。てっきり江戸時代のコースターだと思ってたよ。そっか鐺だったんだ。へええ、そっかあ。

● う、うん…。是非じっくり見てね。

(岡野孝子)



しろうや！

広島城

編集・発行
財団法人広島市未来都市創造財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

平成25年3月8日発行

「しろうや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

(12月～2月の平日は9：00～17：00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人360円(280円)

小人180円(100円)

()内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～31日

臨時休館(平成25年12月13・14日)

臨時開館(平成26年1月1・2日)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト